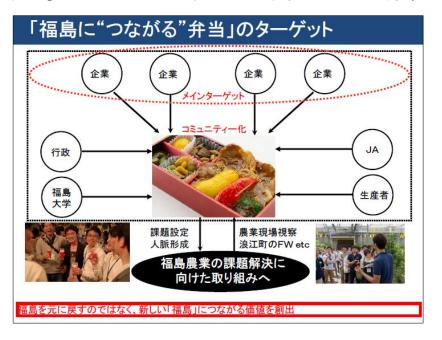
福島に"つながる"弁当 馬場 浅井 赤松 山田





- 初年度売上目標
- 24,000食×1,000円×40%(福島の食材調達費の占める割合) =9.600,000円(福島生産者への売上貢献額)
- 初年度寄付金目標 24,000食×50円=1,200,000円(復興支援活動に充当)
- 初年度facebook利用目標 24,000食×40%(facebook利用率)×10%(投稿割合) =960人(情報交流が生まれる回数)











「福島に"つながる"弁当」今後の展開

- 3ヶ月に1回のペースで新商品を開発(春・夏・秋・冬)
- ・1種類のお弁当に使用する福島の食材は、7~8種類。年間の 使用食材は、28~32種類(20~30農家)になる予定。
- 来年3~4月にかけて、企業向けのFWを開催予定
- ・お弁当を購入いただいた起業のCSR担当者を中心にコミュニティーを形成し、福島の真の課題を把握するFWを行う。
- オリジナルECサイト立ち上げ
- ・福島農産物のブランド育成、販路拡大に役立つコンテンツを 製作し、売上貢献度を向上させる。

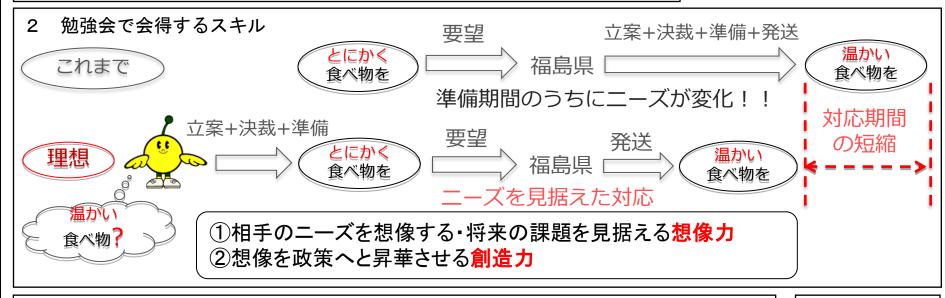


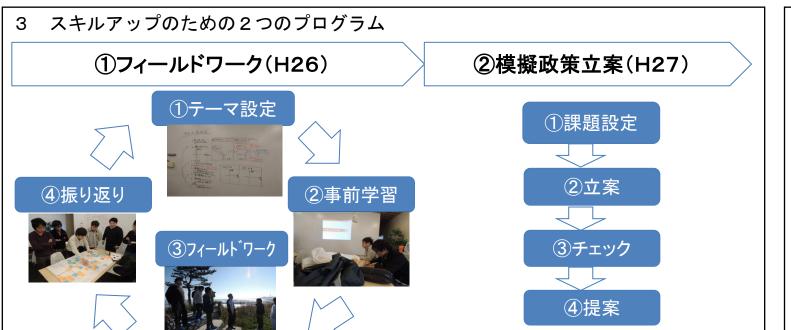




若手福島県 • 東京都職員自主勉強会

1 目指すもの 県民・都民の想いを受け止め、解決策を生む器となる!





テーターなど)を募集しています。てくれる方(ワークショップのファシリに参加したい行政職員②勉強会を支援し自主勉強会の開催に向けて、①勉強会自主勉強会の開催に向けて、①勉強会

事業:「からだあそび塾」〜幼少期における日常的な「身体遊び・運動」環境づくり〜 メンバー:村上和広・佐久間慧・遠藤江里子・菅家元志

プロジェクト立案に至った企画者の思い・背景

子どもたちの運動不足、日常(自宅、近所)における身体を動かす機会の減少を解消したい。

社会的背景・課題

【拝啓】東日本大震災およびそれに伴う原発事故後、放射線への不安等から福島の子どもたちは身体を動かす機会を奪われており肥満の増加や運動能力・体力の低下といった問題が顕在化

【課題】日常(自宅、近所)における身体を動かす機会を制限された結果とし て生じた子どもたちの運動不足

ターゲット・ニーズ(具体的事例等を交えて)

【保護者】震災後、子どもは屋外で遊ぶことが減り屋内で遊んでばかり・・・ 運動不足が心配ではあるけど、どうしたら良いか分からない。 屋内でも良体を動かして遊ぶればと思うが、どのように良体遊びをすればとい

屋内でも身体を動かして遊べればと思うが、どのように身体遊びをすればよいか分からない。

【子ども】楽しく身体を動かしたい

将来的なビジョン・目的・目標

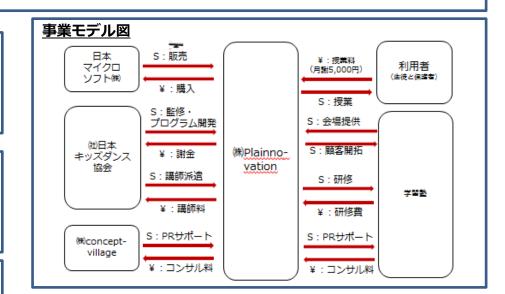
- ・まずは学習塾に導入、その後、保育園・幼稚園、児童クラブや小学校にも導 入をはかる。
- ・子どもたちの運動習慣の定着を促す社会的インフラになることで、日本中の子どもたちが運動好きに!

解決策・事業概要

【概要】マイクロソフト社のゲーム機器「Xボックス・キネクト」を活用した 身体遊び授業プログラム「からだあそび塾」をパッケージで学習塾へ提供。

【流れ】

- ・授業前:毎月1回、からだあそび塾の講師向け研修を開催。
- ・授業中:講師が毎回違ったテーマの「からだあそび」の授業を実施。(授業の様子を撮影)
- ・授業後:録画データを子どもが持ち帰り自宅のPC等で復習。学んだ「からだあそび」を子どもが保護者の前で発表したり、保護者の方も一緒に「からだあそび」を楽しむことが可能。



プロジェクトの特徴(社会的意義・波及効果・新規性等)

- ①生徒と保護者・・・子どもの運動不足の解消。親子で「からだあそび」を学ぶことが出来る。子どもと大人のコミュニケーション活性化。
- ②学習塾・・・空き教室の有効活用。新規顧客へのアプローチ。PRの機会となり認知度向上。福島の子ども支援による企業価値。ブランドの向上。産休などにより長期休暇していた女性スタッフの会社復帰。または現場感を取り戻すきっかけ。
- ③日本マイクロソフト社・・・自社商品の売上増加。福島の子ども支援による企業価値。ブランドの向上。
- ④日本キッズダンス協会・・・ダンスインストラクターの雇用創出。

進める上での課題・協力をいただきたいこと

- ・企業協賛:プログラム開発費および運営費としての資金提供
- ・本事業に興味のある学習塾様との繋がり

「福島県高齢者の健康づくりと地域コミュニティの再生~目指せ!健康長寿!~」

コミュニティチーム@ふくしま復興塾

増子 理子(郡山西部地域包括支援センター勤務)、羽根田 啓子(ふくしま観光復興支援センター勤務) 小抜 勝洋(郡山医療生活協同組合勤務)

プロジェクト立案に至った企画者の思い・背景

震災後、「同居していた息子家族が避難し1人暮らしになった」「郡山へ避難してきたが知り合いがいない」など、それまでとは一変した生活を送る高齢者を目にしてきた。地域の人同士が有機的につながり、いきいきと生活ができる地域を目指したい。

社会的背景·課題

高齢者は、震災後、外出が減り筋力低下や閉じこもり傾向が顕著になり、要支援、要介護者が増加している。今後、認知症や 精神疾患などが増加すると予想されている。

ターゲット

将来的に要介護状態となる恐れのある高齢者 ニーズ

日常的に介護支援を必要とすることなく、自立した生活を長く続けたい

将来的なビジョン・目的・目標

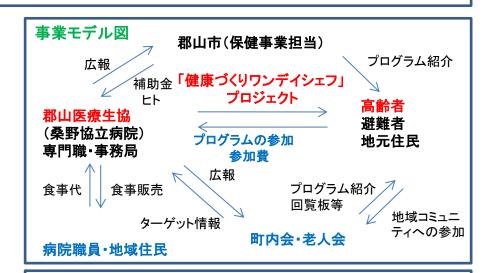
- ・福島県内の高齢者(県人口の26.8%)の健康寿命を延ばす
- 高齢者を孤立させないコミュニティの再生

解決策

メタボ・ロコモ・認知症の負のトライアングルを断ち切る

事業概要

高齢者が集まりやすい病院や介護施設で、「ワンデイシェフ」を 実施し、ランチを販売する。さらに、管理栄養士などの専門職と 協力して「食」を学び、医療と連携したプログラム(理学療法士の 指導のもと運動の実践や、継続した健康管理と相談の場)を設 け、参加者同士の交流を図る。



プロジェクトの社会的意義

【健康づくり】

高齢者…メタボ、ロコモ、認知症予防 ⇒ 自立した生活社 会…健康寿命の延長 ⇒ 医療費・介護費の削減

【コミュニティの再生】

高齢者…人とつながる ⇒知り合いができる ⇒コミュニティ参加 社 会…地域のつながり ⇒ 無縁社会の解消

【事業主体のメリット】

地域貢献 患者・利用者の獲得

進める上で協力をいただきたい方

各地への拠点拡大を見据え、情報交換を進めつつ協力頂ける方。

ポスト311の「お福わけ社会」を創造するIIEブランド事業

~ふくしま復興塾を通して、復旧フェーズの支援団体から復興フェーズの持続可能なビジネスモデルへ転換~ 谷津拓郎、小笠原隼人、高橋恵子

会津木綿商品を使った生きがい内職を提供する事業 復旧フェーズ:2011年3月11日~ 形態:支援団体

すぐ近くに理不尽にも窮屈な生活を強いられている方がいる中で、 自分だけ飄々と日常生活に戻ってしまっていいのだろうか。 何か自分たちが力になれることはないだろうか。

福島第一原発事故の影響で原発30km圏内の市町村住民は避難生活を余儀なくさ れた。知らない土地で慣れない窮屈な生活を強いられ、多くの方が先の見えない 不安の中にあった。

大熊町、楢葉町から会津地域に避難している30~70歳の女性 「何もすることがないのが辛い」「社会とのつながりが欲しい」「生きがいが欲しい」

会津に避難している人たちに、会津を好きになって帰って欲しい。会津で新しい生 活の生きがいを見いだして欲しい。あわよくばそのまま住み続けて欲しい。

会津木綿の手仕事内職を通した生きがい仕事づくり事業を通して、避難先地域で の新しい第一歩を応援する。

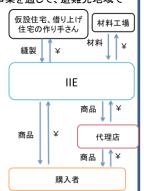
初めは、ミシン内職を中心とするが、得意でない 方も多く、ミシンを使わない誰でもできる仕事づくり に転換→ストールのフリンジ内職の誕生。

敢えて技術を下げることで、仕事づくりの価値が生 まれた。

会津の伝統工芸である会津木綿を用いることで、 商品の差別化をはかるとともに、作り手の方達が避 難先地域の文化に触れる機会を創出した。







ふくしま 復興塾

想い

社会的背景 課題

ターゲット とニーズ

> ビジョン 目的

解決策 事業概要 事業モデル図

ポスト311のライフスタイルを創造するブランド事業 復興フェーズ: 2013年3月11日~ 形態: 株式会社

誰かの不幸せの上に成り立つ幸せはもう嫌です。みんなが一緒に幸せになれるよ うな社会を僕らがしっかりと創って、次の世代の子供達、孫達につないでいきたい。

311はこれまでの経済成長を前提とし無尽蔵に資源を浪費して行く我々のライフス タイルには限界があることを気づかせるきっかけとなった。しかしながら、現実には 311以前と変わらない生活に留まり、矛盾を抱えた生活に息苦しさを感じている。

子供のいる若い夫婦、主婦(=作り手さん達の属性)

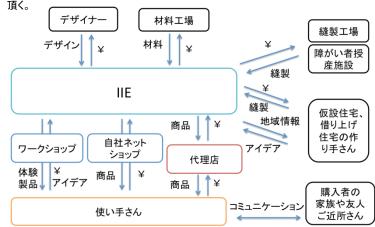
家族や友人、ご近所の人々など、周囲の人と幸せを分かち合う心豊かな生活を送 りたい。それを現在の生活水準を下げずに便利に実現したい。家族との時間を大 切に過ごしたい。友達や職場の人とも気持ちのいい関係でありたい。

自分たちの子どもや孫達に、「生まれてきてよかった」と思えるような社会をつなぎ たい。そのためには、まずその親である女性が幸せな生活を送れる地域社会であ りたい。

①生活・服飾雑貨事業②ネットショップ事業③ワークショップイベントを通して、福 島から新しいライフスタイルの提案を行う。

これまで同様、地域資源を現代的デザインで日常生活に落とし込んで行くという スタイルを継続しつつ、購入後のコミュニケーションも含めて商品デザインを行う (例、既存商品を購入の際に会津木綿ノベルティの入った御福分け(お裾分けと同 意}袋を付けて、それを友達にプレゼントしてください、というもの)。

もう一つの新しい特徴として、購入者一人ひとりにより自分らしい商品を提案する 工夫を行う。これまでも用いてきた会津木綿の豊富なカラーバリエーションと、今後 増やして行くワークショップコンテンツの充実により、自分で創る一点物を楽しんで









夜明け市場を基点とした福島の食の循環モデルづくりプロジェクト メンバー: 松本 丈

プロジェクト立案に至った企画者の思い・背景

飲食街としての夜明け市場と起業家支援団体としてのTATAKIAGE Japan、そして地域の生産者を連携をさせることで、福島の食を通した"新たな価値"をつくれないかと思った。

社会的背景·課題

福島の食は、今までと同じようにただ作っていても風評被害で売れない。全国の応援消費もいつまで続くか分からない。その状況を変えるには、消費者に無理なく興味を持ってもらい継続的消費に結びつける仕掛けが必要だと考えています。

ターゲット・ニーズ(具体的事例等を交えて)

食に関心のある消費者の、美味しい地域独自の食文化を、楽しみたい、買ってみたい、 行ってみたい、知ってみたいという潜在ニーズにリーチする。

例えば、美味しい料理や商品がきっかけとなって、その作り手や生産地のことを知ったり、実際に行ったりということを、これまで食材のみで勝負していた福島から行っていきたい。

将来的なビジョン・目的・目標

福島の食を、応援しよう⇒食べたい!に。

そして福島を、若者が出て行ってしまう場所⇒チャンスに溢れるUIターンの聖地、にしたいと考えています。

解決策 事業概要

風評被害対策を目的とせずに、「地域の食文化を楽しんで頂く」「付加価値をつけていく」ことで、結果として風評被害がなくなるようにする。

- 1. 食に関する学びとプロジェクト創造をTATAKIAGE Japanで行う。
- 2. 農家や生産現場に誘導し顔の見える関係を構築しファンになってもらう、そして、直接消費のチャンネルを農家に持ってもらう。
- 3. 収穫した野菜を、夜明け市場で調理をしてもらい、美味しく食べられる。食べ方を学べる。1へと循環。



プロジェクトの特徴(社会的意義・波及効果・新規性等)

風評被害対策を越えて、地域の食文化を創造することを狙っています。楽しいし、知識も増え、食生活が豊かになる、というトータルの価値を提供することで、結果としてどこにも負けない福島の食ブランドと継続消費の流れをつくりたいと思っています。

進める上での課題・協力をいただきたいこと

- ・パイロットプロジェクトである、100%いわき産野菜スムージー「Hyaccoi(ひゃっこい)」が、クラウドファンディングサイト「チャレンジスター」に応募しているので、出資並びに情報拡散のご協力をお願いします!
- ・長期目標である起業家育成・UIターンの促進のために、いわきでのプロジェクト推進に関わって頂ける方を募集しています!

福島で「繋がる」、仲間づくりツアープロジェクト チームもうすぐ社会人

メンバー: 吉田哲朗(福島大学4年) 板里彩乃(青山学院大学4年)

プロジェクト立案に至った企画者の思い・背景

企画者と同世代の大学生は、大学生活初期に震災を経験し、大学生活特有の余暇の時間を利用して復興支援活動を行ってきた人が多くいる。しかし活動の中で 社会課題の実感やそれに対して行動していくことの大切さを痛感しても、大学を卒業し社会人になる段階で自分自身の将来への不安からそれらの課題に取り組む ことを辞めてしまったり、諦めてしまうケースも多い。

企画者二人も同じように、社会人になってからも社会課題に取り組みたいという思いを持ちつつも、現実的にそれが可能なのかどうかという点で不安を抱えていた。しかし2013年夏にチェルノブイリ、吉田は秋に熊本県水俣市を視察した際に「現代社会の限界」と「変わらなければいけない」「どうにかしないといけない」という強い思いを感じ、その不安に対して大きな変化があった。

社会的背景 : 課題

・現代社会の発展を支える過程で起こった事故により、大きな被害を受けている人たちがいる一方で、それを忘れていったり、あるいはそれらの被害よりも経済発展や利益を優先してきた社会的背景

ターゲット・ニーズ(具体的事例等を交えて)

【これまでの事故での被災者】自分たちの経験を語り継げず、再び事故が起きてしまったことへの後悔と無念をもつ人、語り継ぎたいと思っている人 【福島と向き合ってきた大学生】①福島の課題に取り組んできた人②社会人になってからも社会課題に関わる意識を持ちたいという人

将来的なビジョン・目的・目標

社会人になってからも社会課題へ取り組むキッカケと仲間づくり。また、その仲間コミュニティから課題解決へのアクションが起こること。

<企画者的目標>ダークツーリズムの活性、事業化の調査

解決策•事業概要

福島と類似する課題を抱えてきた熊本県水俣市でのフィールドワーク。 事前事後にワークショップを開催し、水俣を感じたことを参加者全員が言葉にしてブログやメディアを通して発信する。参加者間でコミュニティをつくり、ツアー後も社会課題に向き合う仲間をつくる。

<企画者的目標への解決策>水俣市民との交流。ゆくゆくは福島でのダークツーリズムツアー企画を念頭に入れつつ、水俣でダークツーリズムツアーを開催する。ツアーの効果検証→参加者の事前と事後の気持ちや行動の変化、語り部となる被災者の心理的負担や想いを理解する。

ツアープラン(3泊4日)

【1日目】

- ・水俣湾フィールドワーク(相思社ガイドの案内によって)
- ・水俣病資料館・エコパーク見学
- ・相思社にて、水俣支援者と交流会

【2日目】

- ・水俣病患者との対話
- ・行政職員との対話/水俣のまちづくり施策について質問会

【3日目】

- ・愛林館にて村まるごと博物館の施策を見学
- ・地元若手リーダーとの対話会
- ・エコネット水俣見学

【4日目】

・水俣の若手・熊本大学の学生らとワークショップ

プロジェクトの特徴(社会的意義・波及効果・新規性等)

- ・企画者自身が参加者としてダークツーリズムに参加し、その意義の大きさを 実感した経験から、企画していること。
- ・「見る」「知る」に留めずに、参加者が自分自身の課題として社会課題を捉えること(=社会課題の自分事化)を目指していること。

進める上での課題・協力をいただきたいこと

- •資金
- 参加者の募集

ふくしまイノベーターズカレッジ(仮) プロジェクト

メンバー: 片貝英行

プロジェクト立案に至った企画者の思い・背景

自己変革能力は無いが、何とかしたい(または、何とかしろと言われている)自治体職員、大学職員、学校教職員に多く会ってきた。 失敗できない・失敗したくない・見通しが立たない。けれど、役に立ちたいという願いを実現したい。

社会的背景•課題

- イノベーションが起きない地方都市・地方地域
- 地域基盤を担う自治体・大学・学校教職員の能力不足
- ・次世代人材育成できない地域、地域産業の深刻な衰退

ターゲット・ニーズ(具体的事例等を交えて)

変革しようにも実戦経験が無いので、どうすれば良いか分からない。(だから、やらない、先延ばしする)

「子どもたちの成長やイノベーションを妨げているのは大人」だという悲しい事実に気付いていない。

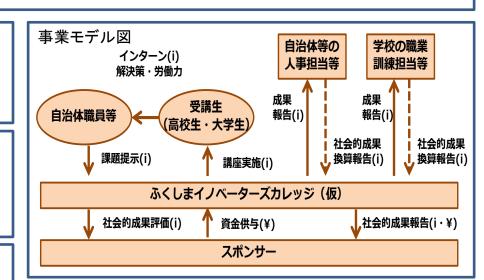
将来的なビジョン・目的・目標

- 震災復興支援事業の多額のお金がなくなった後の福島を支える 人材を地域で育てることを目指す
- 福島特有の課題をイノベーションを通じて解決するプロジェクトを 高校生や大学生たちと1つでも多く立ち上げ、成功体験と失敗体 験を福島県内に残していく

解決策•事業概要

高校生や大学生を地域発のイノベーターとして育成する過程で、 自治体、大学、学校(教員)等 地域基盤強化を担う職員の能力開 発を行う。

ふくしまの未来を何とかしたいと考え企画立案する高校生が主体のプロジェクトに一緒に関わることを通じて、福島復興について自らも考え、現場の声を聞きながら施策やカリキュラム開発を行う。



プロジェクトの特徴(社会的意義・波及効果・新規性等) 「失敗できない・失敗したくない・見通しが立たない」方々が失敗 しない環境を整えることができる。うまくいけば、成功事例として 次年度以降に引き継げるように予算獲得までサポートする。 行政の成功事例は、他の自治体などへ横展開しやすい。

進める上での課題・協力をいただきたいこと

各自治体や団体で持っている「解決したい課題」を提供して頂きたい

「ふくしまの被災地ツアー」大学教育プログラム化プロジェクト

メンバー:ふくしま復興塾 高橋あゆみ(福島県出身/福島大学卒/インターンシップコーディネーター)

●プロジェクト立案に至った企画者の思い・背景

東日本大震災後、福島大学生は避難所運営や仮設住宅での住民支援などに自主的に取り組んできた。学生の自主的活動の中で、福島県内で被災地ツアーを企画運営した「スタ☆ふくプロジェクト」は2013年6月、観光庁主催の第1回「今しかできない旅がある」若者旅行の表彰で東北ブロック賞を受賞した。彼ら彼女たちは、ツアー企画を通して地域の魅力や課題を掘り起し、地域住民に活力を与え、さらにはツアー後も地域の「語り部」的存在となった。それだけではなく、彼ら彼女たちはその中で、福島や震災に対して見方が変わり、福島への愛着や当事者意識を持つようになった。このことから、このツアー企画が「教育プログラム」として大学のプログラムとして活用できるのではないかと考えた。

●社会的背景・課題

- ・震災から2年半が経ち、学内でボランティアや社会貢献活動を行った ことのある学生が減っている ⇒ 将来の福島の担い手不足
- ・双葉八町村をはじめとする被災地から若者が流出している

●ターゲット・ニーズ

【ターゲット】 福島大学2年生(全学類)、福島の震災復興に興味があるが何から手をつけたらいいか分からない学生

【ニーズ】 福島で何が課題か、何を求められているのか知りたい

●将来的なビジョン・目的・目標

【目的】・学生地域実践ノウハウ(課題発見~課題解決の力)の醸成

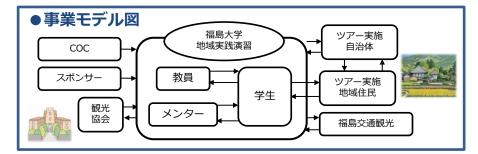
・地域課題の新たな発掘

【目標】1年間で福島に当事者性を持つ学生を30人増やす ※平成27年度~のふくしま未来学のカリキュラムへの導入を目指す

●解決策・事業概要

福島大学 地域実践学習「ふくしま被災地ツアー」(仮)の実施

- ・通年プログラム(2年前期~後期) ・受講生 30名想定
- ・学生の自覚と課題発見を深化させる事前、事後研修を設ける
- ①ツアーミニ会社をつくる(10人1グループ)
 - ※役職、コンセプト、関係者・スポンサー交渉、現地視察もすべて自分たちで行う
- ②ふくしま被災地ツアーの企画・運営実施
 - ※ツアー実施自治体:南相馬市、伊達市、川内村、広野町、福島市、(新地町) ※ツアー参加者は、福島大学1年生を想定
- ③ツアー企画の検証と、新たな地域課題を踏まえた改善案立案



●プロジェクトの特徴(社会的意義・波及効果・新規性等)

【地域】・学生が地域コミュニティに入っていくことによる地域活性化

- ・地域の新たな魅力や課題の掘り起し
- ・地域への新たな人(若者)の流入の機会 ※ツアー参加者を大学1年生にすることで継続的な関わりが可能に
- ・ツアー企画運営を通して、学生が地域の「語り部」となる

【学生】・問題発見、課題解決能力の向上

- ・プロジェクトマネジメントのスキルの習得
- ・地域の新たな魅力や課題の発見、問題意識の醸成

このプログラムで見つけた自分の気づき・地域の課題を「マイ・プロジェクト」化し実施する科目(3年次履修)を設けることで、継続的に地域のつながりをつくりながら、学生の力を伸ばしていく。

●進める上での課題・協力をいただきたいこと

- ・学生チームを支えるメンターとなっていただける方の募集
- ・ツアー実施地域の住民とコミュニケーションをとれる方の発掘
- ・COC予算に頼らない資金繰り
- ・教育指標づくり

- ■プロジェクト名:じいちゃんばあちゃんコミュニティ(高齢者が主体的に関わる地域の拠点づくり)
- ■メンバー: 小林紀子(コミュニティグループ)

■プロジェクト立案に至った企画者の思い・背景

一日中家に引きこもり、外出の機会が少ない高齢者の現状を見て、そのように過ごすことだけが余生の過ごし方ではないのではと感じていました。畑仕事、針仕事、地元に伝わる料理の伝承、孫や近所の子どもたちの面倒を見る等、高齢者がこれまで培った経験とスキルを地域に伝播することこそ高齢者の持つ大きな役割であり地域財産であると思っています。 それらをしまっておくのは惜しいことであり、自分の祖母の姿と重ね合わせ、何よりも高齢者もいきいきとした余生を過ごしてほしいという思いがこの事業の出発点となっています。

■社会的背景

東日本大震災後、福島県内では原発事故や津波被害の影響で多くの住民が避難を余儀なくされた。圧倒的人口の移動、流出で県内の従前地域での地縁関係(コミュニティ)は大きく崩壊し、コミュニティが分断され再生されにくい状況にある。

■課題

- ○高齢者の地域との関わりが希薄化(地域での役割がない/少ない
- ○震災以前からの地域無縁化の傾向+震災後の新しいコミュニティ)

■ターゲット

- ・福島県域に居住し、家に引きこもりがちで外出の機会が少ない高齢者
- -従前地域に居住する高齢者
- 震災を機に避難されてきた高齢者

■ニーズ

- ・福島県域に居住する高齢者
- -地域と関わりたい、生きがいを見つけたい

■将来的なビジョン・目的・目標

- 〇高齢者が集まれる拠点づくり(高齢者にとっての楽しみ、生きがい創出、孤独感の解消)
- ○高齢者だけでなく、地域を構成するあらゆる人をまきこんだまちづくり

(「誰でも集まれる拠点」を目指す/「地域を育てる」循環づくり、人のつながりを編み直す)

〇高齢者の地域における役割創出

(地域の見守り/幼稚園や小学校等への食育出前講座/地域文化の伝承等)

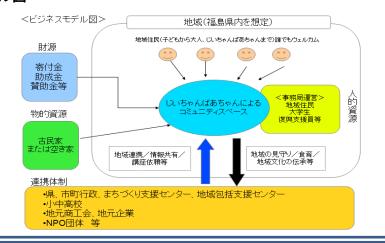
■解決策・事業概要

○誰でも集まれる拠点づくり

(古民家や空き店舗等を利用したコミュニティスペース)

- ○ワークショップやイベントの開催
- (地域の伝統食等のワークショップや週末のイベント等)
- ⇒これらを通して、じいちゃんばあちゃんも地域に主体的、自発的に地域に関わることのできるコミュニティの渦を生み出す。

■モデル図



■プロジェクトの特徴(社会的意義・波及効果・新規性等)

誰でも集まれる拠点をつくることによって、本事業計画の目的である「高齢者が集まれる 拠点づくり」「高齢者だけでなく、地域を構成するあらゆる人をまきこんだまちづくり」の達成 が見込まれるほか、中長期的ビジョンとして、地域における役割(※例)が創出され、高齢 者が主体的、自発的に地域への関わりを持つという波及効果が見込まれる。

※例:地域の見守り

幼稚園や小学校等への食育出前講座 地域文化の伝承等

■進める上での課題・協力をいただきたいこと

提案やアドバイス等をしてくださる方、このプロジェクトに興味をもってくださる協力者がいらっしゃれば幸いです。